

2020年6月14日(日)

上尾合同教会

聖書 詩編 35編 23~28節

ヨハネの黙示録 4章 8~11節

説教 「黙示録⑳—聖なるかな、聖なるかな」

武田真治牧師

おはようございます。こうして分かれて礼拝を持つということも、今回で終わる事になると思います。来週からはこの礼拝堂で共に礼拝が奉げられる希望を持って歩いて行きたいと思います。

ヨハネの黙示録を読んでおりますけれども、この黙示録を読み通すための鍵、理解していく鍵がいくつかあると思いますが、そのひとつの鍵が数字だとよく言われてきました。黙示録は、数にこだわる、数字に意味を込めていると。

例えば、皆さまもよくご存じの3という数は、三位一体とか、キリストの三職、まことの大神司、まことの王、まことの預言者であるとかですね、そういう風に神様、または天に関する数は3だと。実は今日の聖書の箇所にも良く出て参ります。もう一度ヨハネの黙示録4章8節を見て頂きたいのですが、新約聖書457ページ、8節「この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その周りにも内側にも、一面に目があった。彼らは、昼も夜も絶え間なく言い続けた。『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな』。ここがそうです。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」が三つ。さらに「全能者である神、主、かつておられ、今おられ、やがて来られる方」。これも神様に対して、神・主・そしてかつておられ、今おられ、やがて来られる方。三つですね。さらにはかつておられ、今おられ、やがて来られる方。これも3と。このように神様や天に関するものは3となっています。そしてその3の次の4です。

3が天上に関する言葉であるならば、4は地上に関する言葉、数という事になります。例えば、東西南北とかです。ですから今読みました8節に「四つの生き物」と出て参ります、生き物が四つだと。これ三つではないのですね、四つだと言うところに、これは地上のことに関わる存在だという事が示されています。この四つの生き物と言うのは、その前の7節に「第一の生き物は獅子のようであり」と、この獅子はライオンですね、これは野獣の代表だと。それから「第二の生き物は若い雄牛のようで」と、雄牛と言うのは家畜や飼われていた動物の代表であり、それから「第三の生き物は人間のような顔を持ち」は、まさに間の代表ですね。そして鷲がその後に出て来ます。「第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであった」と、これは空を飛ぶ生き物の代表。つまりこれは地上の生き物を四つに分類して、それぞれの代表をここに挙げています。地上、東西南北、その各々の代表者が天に居るのだと考えて頂いていいと思います。

で、その天の数3と地の数4を足すと7、完全数ですね。つまり天と地なのです。掛けて3×4だと12という事になるのですけれども、多くの場合は3+4で7、つまり完全数なのです。一週間が七日間とかですね。聖書の7はラッキーセブンとそこから言われて来ています。黙示録にも7という数字が本当によく出て来ます。七つの封印、七つのラッパ、既に私たちが見ましたように

2章から3章に出て来ました教会への手紙も、七つの教会、七つの手紙というように、七と言うのは完全数、もうそれで充分、総てを顕すという事なのです。

で、その完全数の7に、ひとつ足りない6と言うのは、従って、人間的には一番高まった数が6というふうに考えます。7になるとこれはもう神さまの領域に行ってしまうのだという事ですね。6というのは、人間としてこれは最も達成するところのギリギリの所が6。逆に言うと、どんなに頑張っても、どんなにすごくても、6止まりなのです。7に行ってしまうと神様の領域になると言うことです。故に、神さまは天地創造を六日間で、この天地創造を六日間で終えられた訳で、七日目は、休まれたというのです。これはまだ神様にはもうひと日、一日分の余裕と言いますか、神様の完全にはまだ地は達していない、そういう意味も込められております。従って、この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、どうして六つなのかということも、七つになってしまったら、これは神様になってしまう、神様に匹敵する存在になってはいけません。六つの翼という事は、飽くまで神様よりも下の存在、使い、御使い、六つまでしか翼は持てないということです。でも、持てる最高の、最大の数の翼を持っているのだとそういう意味にも取れるのです。

どうでしょうか？ このように数字、数に込められた意味を考えて読んで行くと、黙示録はまた違った面白さを持ってくると言われています。

さて、ここで前回の説教で紹介できなくて、後から質問を受けたことですが、今読みました、この四つの生き物、この「生き物」というのは何の事ですか。これはもともとのギリシア語では ζωον (ゾーオン) という言葉です。ゾーオンと言うのは ζωη (ゾーエー) という言葉から来ており、ゾーエーと言うのは「命」です。我々のこの命であります。生きています。だから「生き物」という訳になるのですが、私は一番良い訳は「命あるもの」と訳した方が良いかなと思います。生き物というと、あまりイメージが良くないですね。四つの命あるものがいたってことです。これは勿論、神さまの御使い、天使です。神さまが命じたもうことを実際に行う。ここでは天の礼拝、神様の礼拝に奉仕をしている、そういう存在なのですけれども、決して操り人形や、ロボットや機械ではないのだと、ちゃんと命を持っている、自分の思い、考え、意志を持っている存在として神様に仕えていると。だからこれは、喜んで、本当に心から神様に仕え、神様の使いとして、手となり足となり、時には地上へと私たちのために降りてくるような存在が、天に居るのだということを示していると言ってよろしいのではないかと思います。

そして、彼らは、前回も申しましたように、こう一面に目があるわけですね、これは6節の後半にありました。「この玉座の中央とその周りに四つの生き物がいたが、前にも後ろにも一面に目があ

った」と。前にも後ろにも、つまり両面に目があるという事は、例えば前の方を向いていても、後ろの方もちゃんと見えているということです。この目は、二つのものを見るための目だという事を前回ご紹介させて頂きました。それは、神様の事を見ると同時に、地上の事をいつも隈なく見ている。一方で、神様の一挙手一動を見逃さないようにちゃんと見て、神様が「行け」あるいは「こうしろ」と言われたら、すぐに反応して出て行くことが出来るように、神様のことをいつも見ている。同時に、地上のことも見て、いろんなことをちゃんと見て、それを神様に報告をしたりする、そのような存在なのだと言っているのです。そして、彼らの最大の役割が、神様への讚美歌を歌う事だったのだと。それが今日の箇所8節の「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」でした。そして、本日はその四つの生き物を囲むように、二十四人の長老という存在が居るのだということと、その長老の様子に関して注目をしていきたいと思えます。

9節、10節を読みます。「玉座に座っておられ、世々限りなく生きておられる方に、これらの生き物が、栄光と誉れをたたえて感謝をささげると、二十四人の長老は、玉座に着いておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、自分たちの冠を玉座の前に投げ出して言った。『主よ、わたしたちの神よ』」です。最初にやはり気になるのは、今日の流れて言う二十四という数字ではないでしょうか。

前回、この二十四というのは、旧約聖書の伝統で言うならば、エルサレム神殿でそういう祭儀を奉仕する、礼拝に奉仕する祭司たちが二十四組あったという事から、この二十四という数が来ているのではないかという説や、或いは旧約聖書の12部族、ユダとかベニヤミンとかですね、そういう12部族と、新約聖書のイエス様の12弟子それを足した数が二十四ではないかとも申しました。今日、この数についての考察から考えますと、二十四というのはまさに4×6という事になります。シロク24ですね。4というのは地上に関する数でした。そして6というのは人間として一番多いことでした。これを足すと10です、4+6は10なのです。掛けると4×6は24なのです。従って、これはこの地上の数の人間としての最も多い数ということを示しているのが24ではないか、つまり大事なことは、決して天の数ではないという事なのです。地上で実際に生きた人間たちが死を迎えそして天に召されて、神様の側で神様の礼拝のご用に当たるのを任された人たちが24だと。3でも7でもないのです。

12というのは12弟子とか12部族というのは地上で何か集まりを持ったり、集会を持ったり、グループを作ったりするまでのひとつの大きな単位です。それ掛ける2だというように考えてももちろんよろしいのですけれども、この地の数の4と人間の数で一番多い6とを掛けると24にな

ると。つまり大事なことは、天上の人たちではないのです。例えば、この二十四の長老たちがもとと天の神々とか、天使たちから生まれて来たとか、地と関係ない存在として現れているのではなく、地上で実際生きた人間たちが天へと召された時に、この神様の御座に付くことが許される、そういう者たちなのです。私たちと同じ地上で生き、そして地上で神様を信じ、その地上で信仰を全うした者が天上に据えられている玉座に迎えられて『あなたはそこに、ここで坐っていいよ』と言われたのがこの二十四人の長老たちです。これは、元々我々と同じ人間だということですね。

そして、彼らは 10 節「二十四人の長老は、玉座に着いておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、自分たちの冠を玉座の前に投げ出して」とあります。彼らの役目は何かというと礼拝をするという事なのです。単にロボットや人形ではなく、また義務でもない。喜んでそうしているのです。言い方を変えるならば、どうしてこの二十四人が選ばれたのか、或いはこの二十四人の長老を神様が選ばれた理由があるとするならば、天の礼拝の御用に当たること、その御用を何よりの喜びとし、それが本当に嬉しいと思っている、そういう人間、そういう存在が、天に於いて二十四のその座で、心おきなく本当に神様を礼拝していいよ、もうずっとここで私のために生きて欲しいと、そう言われているような存在なのですよ、そうではないでしょうか。

その際、ここで目を引く表現がひとつあります。10 節なのですが「自分たちの冠を玉座の前に投げ出して」いるのです。面白いですね、わざわざかぶっていた冠を神様の前に投げ捨てて、そして礼拝をしているのだと言うのです。この「冠」って何か？

これは既にこの章の 4 節に出て参りました。「また、玉座の周りに二十四の座があって、それらの座の上には白い衣を着て、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた」と。頭に、金の冠を既に彼らはかぶっていたのだと出て参ります。古い、昔からの解釈で申しますと、この二十四人の長老が地上で大きな事業を起こし、そして良き政治をした、そういう世界中の良き王様なのだ、そして天に上げられて、神様から『良くやった、良き王として生きた』と褒められて金の冠を授けられ、玉座に着いた王たちなのだという解釈です。しかし礼拝をする時には、その金の冠を投げ出したという事は、彼らが為してきた地上での立派な業績や、名声や、築いてきた財産や良き物を、神様のみ前では、すべて捨てるのだということです。何の価値もないものと捨て去って神様の前にひれ伏す、そういうことをしているのだと。これは成程、筋の通った解釈だとも言い得ます。

伝道者パウロも、神様を信じるようになって、今まで、名誉だ、自分の栄光の印だと思っていたもの、自分にとって有利であったものを、キリストの知るそのあまりにも素晴らしさの故に、もはや塵(ちり)芥(あくた)と言っていますね、無駄な捨て去るべきものとして思えるようになったのだと

いう事を、フィリピの信徒への手紙 3 章 7 節、8 節で言っているのと同じだと思います。いくら立派な名声、名誉、それこそ栄冠を持っていたとしても、それはキリストを知った後では、或いは、礼拝するために神の御前に出た時には、そんなものは何の価値もないと捨て去るということに通じると思います。『成程な』と、この読み方も良いかとも思うのですけれども、ただ一点、一点だけ気になるのは、地上でその有名な王様、その立派な業績や、良き政治を行ったその王様がこの長老たちで、地上の業績を金の冠が表すとなると、天でも地上の業績や名誉というものも引きずるのか？

それでは結局、玉座に付かせられるのも、地上の業績によって選ばれるということになってしまうなら、それは違うのではないかと、そうではないだろうと思います。

天で与えられたこの金の冠というのは、天の基準で与えられるべきものであって、地上で何かしてきたとか、立派な業績を残した良い王様だから与えられる、そのようなものではないのです。ですから、もうひとつの読み方としては、この金の冠は、この二十四人の長老に選ばれたという印ではないかと。神様によって二十四人に入れられたという事実をこの金の冠が表すと。そうだとすると、この 10 節で、長老たちが「自分たちの冠を玉座の前に投げ出している」ということの意味は、そんな資格は自分にはありませんと金の冠を投げ出していることだと読むことが出来ます。自分はこのような名誉を受けるほどの人間ではございませんと、そういう意味にとっかまわらないのではないかと思います。

カトリック教会ではこの二十四人の長老というのは全員少なくとも殉教者だと言っています。キリスト教の伝道の為に命を落とした殉教者に与えられる金の冠だと。どうしても殉教者というのは特別扱いしてしまいたいものですがけれども、そうであっても、大事なことはやはり、その金の冠を投げ出しているのです、自分はそんな立派な者じゃない、そういう名誉を与えられるそんな存在ではないと。言うならば、神様の前では、ひとりの罪人にしか過ぎないのだと、地上でその命をキリストの為にささげて来たとしても、神様の前ではやっぱりひとりの罪人に過ぎないという事を表すのが、自分たちの金の冠を玉座の前に投げ出すという事ではないでしょうか。考えてみれば、礼拝をすると言うこと自体が神様の前に出るという事であり、もはや自分の名誉とか、業績は全く関係がなくなることはないか。もっと言うならば、そこでは自分が信仰深いとか、神様の為にどれだけ自分は犠牲を払って来たとか、或いは信仰を持ってどれだけまじめに生きて来たかとか、それさえも関係無い、問題にならない。その冠を投げ出して、ひたすら神様を讃美する、その感謝、満足で歌うのだという事ではないか。彼は心から喜んでいて、金の冠を苦しくて投げ出しているの

ではない、神様を礼拝する喜びに満たされて、もう今までの事なんてどうだっていい、神様を讃美できた、それだけで自分は本当に満足ですと、その喜びに包まれながら、もう他に何もいらぬという事ではないでしょうか。

今回のあの新型コロナウイルスの事で、礼拝も自粛を求められました。その中でようやく今度の21日から我々は礼拝をここで奉げられるかなあと、本当に期待をしているのですが、その為に色々配慮をしなければいけないのですが。礼拝を止めるようになって、改めて気付かされたことは、私自身、礼拝をするという事が、恵みなのだなど、与えられているものなのだなどという事をしみじみ感じさせられました。

まさにここで長老たちがそのようにして声高らかに賛美をする歌が11節です。「主よ、わたしたちの神よ、あなたこそ、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、御心によって万物は存在し、また創造されたからです。」

この讃美歌も実は、数字の3が影響しています。「主よ、わたしたちの神よ、あなたこそ栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方」と、これ三つですね。次の「あなたは万物を造られ、御心によって万物は存在し、また創造されたからです。」これも三つ、神様に対する褒める言葉が語られています。「栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方」とは、まさに先ほどの金の冠を投げ出す行為が表現していることでしょう。あなたこそ真の栄光、真の誉れを受けるその方なのだ。

特に、ここで神様の素晴らしさとして賛美されていることは、天地創造そしてその万物が御心によって存在し、また、今も保たれているという点です。この点は、この二十四人の長老たちも、その天上から地上の様子を見ているということが前提になっています。この天地を創ってくださった、そして今も御心に従ってあなたはこの天地を導いて保ってくださっている、色々な問題はあろうし、災害も起こりました、こんな疫病も起こっているけれども、その中でもあなたはこの世界を裁かないで守り、何とか維持し、導こうとくださっている、そのことに関して、彼らは讃美の声を上げている訳でありますから、ちゃんと彼らも地上の様子を見ていると言い得ます。つまり、この地上で生きている私たちのことをちゃんと見守って、神様どうぞ彼らを守って下さい、導いてください、地上で苦勞している者たちを、どうぞ更に強い御手でもってあなたが導き支えてくださいますようにと。そのことを願っている言葉になるわけです。我々もまたこの天上の長老たちに、またその周りにいる先達たちがこの天上から、我々を見守ってくださるということに、その彼らの応援を受けながら生きていきたいなあと思います。

最後に有名な言葉を一緒に見て終わりたいと思います。

この長老たちの讃美歌の最初の「主よ、わたしたちの神よ」という言葉ですけれども、これ原文ではギリシア語の *ο κυριος καλεο θεος ημων* (ホキュリオス カイホセオス ヘモン) です。キュリオスつまり「主」と、そしてセオスつまり「神」とが一緒に呼びかけられているのです。

普通、神様に呼び掛ける場合には、詩編なんかまさにそうなのですが、祈る時に「主よ」と呼ぶか、「私たちの神よ」と呼ぶか、どちらかなのです。それをこのようにふたつ一緒にしちゃうと、逆に言うとあんまり良くないと考えられてきたのです。ですから新約聖書では、このキュリオス=主と、セオス=神とが、ふたつ並べられて神様のことを呼ばれているのは、たった二回しか出て来ません。一回はここです。もうひとつは、ヨハネによる福音書20章の28節です。あのイエス様が復活された時、弟子のトマスがイエス様の手の釘の痕に自分の指をいれてみなければ、剣で刺された脇腹に自分の手を射し込んでみなければ、俺は信じない、復活なんて信じないと言っていたあのトマスに対して、イエス様が彼の前に顔を出して、『あなたの指を入れてごらん。脇腹を手で触れてごらん』と言われ、そして『信じない者ではなくて、信じる者になりなさい』とおっしゃったあの時に。そのイエス様の言葉を、聞いてトマスが『我が主よ、我が神よ』と言った、あの言葉とここだけなのです。まあ、だから特別な表現なのでしょう。因みに旧約聖書でも、旧約聖書のギリシア語訳聖書七十人訳、セプチャーアギンタというのがありますが、我々が今持っている続編とか、偽典をのぞいた正典の中では、唯一回です。詩編35編の23節にしか、この主と神と一緒に呼ばれているところはないのです。これが先程実は読んでいただいた箇所なので。もう一度そこだけ読みましょうか、詩編の35編の23節「わたしの神、わたしの主よ、目を覚まし起き上がり、わたしのために裁きに臨みわたしに代わって争ってください。主よ、わたしの神よ」と。ここが唯一神様と主と一緒に呼ばれている箇所です。あとはないのです。主か、或いは神様、どちらかなのです。

で、じゃあ、何故、ヨハネの黙示録の方で、この「主よ、わたしたちの神よ」と呼ばれているのかと申しますと、実はこの言葉をラテン語で訳しますとこうなります。Dominus et Deus noster (ドミニス・エト・デウス・ノステル) なのです。実は、ヨハネの黙示録が書かれた時のローマの皇帝の名前がドミティアヌスです。彼は歴代の皇帝の中で最も尊大で、自分を神だと呼べ、神の子として生まれて来た。ローマ帝国内のすべての人々に皇帝礼拝を強いて、それに従わない者は容赦なく牢屋に入れ、首をはねたわけです。彼は、自分の名前ドミティアヌスに引っかけて、ドミニス・エト・デウス。つまり「主であり、神である」とあえて呼ばせたのです。そして、例えば、公の文章で

ドミティヌアヌス皇帝への手紙を書くときに、このドミヌス・エト・デウス・ノステル=我らの主であり神である方へと、わざわざ公の文章で書かせたのです。それに対して二十四人のこの長老たちは、ローマ皇帝ドミティヌアヌスが我々の真の主、真の神ではない。我々の主、我々の神は本当にこの天上の主なる神様なのだということをここで告白しているのだと言われています。なるほどなあとと思います。『あなたこそ、私たちのまことの主、私たちのまことの神であり、あなたこそ栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です』と。ここに「力」と言う言葉が加えられているのも、やはりローマ皇帝のことが意識されているのではないかとされているところです。どうでしょうか。

カトリック教会では、この二十四人の長老たちは、生前も地上でローマ皇帝に膝を折らず、頭を下げないで「主よ、わたしたちの神よ」と言って、結果、殉教した人たちだったと言っています。だからこの天上でもこのように呼びかけているのだと。まあ、そうとも考えられるのですけれども、私はむしろ、地上ではドミティヌアヌスに皇帝礼拝を強要されたかもしれないけれども、しかし、天上の礼拝においてはもはや、なんの妨げもなく真の礼拝をささげられると。神様を目の前にして『ああ、あなたこそ私達の主、私達の神』、『我が神、我が主よ』と、そう呼んで、本当に全ての束縛から解放されて、何の妨げもなく天上で、真の神様を礼拝できる喜びを表す言葉だと、そう受け取りたいと思います。我々も地上では色々な妨げや、或いは地上に生きる人を『神様と呼べ』と、そう言う人たちもいる状況の中で、私達は、天上に於いて、本当に何の妨げもなく天の神様を『我が神、我が主よ』と、そう呼べる喜びに満たされる、そのような時が与えられているのだということを思って生きていきたいと思っています。

お祈りをします。

天の父なる神様、今、自肅を求められている礼拝に集っています。しかし、ひとりて今、礼拝を捧げておられる方がおられるかも知れません。しかし、天上に於いてはそのような私達一人ひとりのこの有様を見ながら、天で共に礼拝をささげて下さっている先達たちが、信仰の先達たちがいるのだと。そして、私達もいつか、その天上の礼拝に加わることができるのだと。そして、真の喜びをもって『我が主よ、我が神よ』とそう呼べる喜びを告白し、讚美にあふれる時が来るのだということ思いながら、今この世界で、この世の支配者に、いろんな問題や、本当に圧迫のあるこの状況の中で、しかし、できる限りあなたへの讚美の声をあげていけるものとして生きていけますように。地上の支配者に支配されない、天上のあなたを見上げながら生きていく生き方をしていくことが

出来ますように。しかし一方で、真の礼拝は、天にあるのだということも忘れないで生きていけますように、導いてください。御名によって祈ります。アーメン。